はじめに

本講義は旧帝大をはじめとした難関国公立大学合格を目標とする講座です。

難関国公立大の現代文といえば

「記述のポイントがわからない」
「そもそも勉強して点数が上がるのか」

というものです。しかし、論理的構造分析を身につけ、論理のルールに従って解答していけば、全ての問題に根拠をもって解答することができるのです。

「難関国公立大の現代文は難しい」
という常識を覆すのがこの講義です。

本講義を終えたとき
「周りがほとんどまともな対策をしない現代文こそ、差をつけることができる科目だ」
と思えるように講義をしていきます。

この講義で、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

①　**文法**
②　**構文**
③　**論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **・「でない」という否定**
- **・「かつ」という連言**
- **・「または」という選言**
- **・「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

本講義では「制限時間あり」で60%を目標として解答してください。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　**問題を解く。解答の根拠をメモしておく。**

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、各チャプター後に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	復習ポイントを覚える。解答を書き直す。

難関国公立大 現代文対策講座　目次

第一講 「差異」と「類似」を読む …… p.8
第二講 「逆説」を読む …… p.18
第三講 「論理」を読む …… p.28
第四講 「論証」を読む …… p.40
第五講 「心情」を読む …… p.52
第六講 傍線部内容説明問題解法 …… p.60
第七講 傍線部理由説明問題解法 …… p.74
第八講 傍線部心情把握問題解法 …… p.82
第九講 要約問題解法 …… p.92
第十講 全体把握問題解法 …… p.100

巻末付録
読解法一覧 …… p.112
傍線部内容説明問題解法 …… p.132
傍線部理由説明問題解法 …… p.135
傍線部心情把握問題解法 …… p.143

第一講　「差異」と「類似」を読む　40分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私たちは、ふだんなら自分がどんなリアリティを得ているかめったに問題にしないし、意識することもない。ヴァーチャルリアリティ※などという新しい技術に接してみて、初めてリアリティとは何かについて考えたりするものである。「臨場感」などは、その①テンケイであったといえよう。それでは「ヒトらしさ」については、どうだろうか。

ある意味では、Aまったく同じことがいえるかもしれない。私たちは日常さまざまな人間と関（かか）わって生活しており、相手はそれぞれＡさんＢさんといった実体を備えている。もちろん、私たち自身も人間である。本当に人間なのだからヒトらしいのはあたりまえで、ふだんは「らしい」「らしくない」などについて意識するどころではなく、その「ヒト」たちといかにうまくやっていくか（デートの誘いにのってくれるか、けんかして勝てるか）に追われて『ヒトづきあいの本』を読みあさったりしているのが、私たちの実態だろう。ヒトとして生きるのに手一杯で、ヒトらしさとは何か

など考えてもみないのが本来かもしれない。

しかしながら、それでは私たちが日常ヒトらしさを少しも気にしていないかというと、けっしてそうではない。はっきり意識してはいないけれど、私たちはヒトらしさに対して非常に敏感だし、それを問題としているのである。

たとえば、「医者を選ぶ」という状況を思いうかべてみよう。風邪で体調が悪いとき医者のもとへ出向いた経験は、誰(だれ)でも一度ならずもっている。また風邪をひいてしまったときは、これまでかかった医者をいろいろ思い出し、どの先生のところへ行こうかと迷うものである。もちろん、きちんと診断してよい薬を処方する腕の確かな先生がよい。しかしその人が腕はよいけれど、こちらがいまどんな痛みを感じているのか、それでもいまは休むことができないどんな事情があるのかなどにいっさい聞く耳をもたず、「そんなことは関係ないし、どうでもよい」とする医者なら、どうだろうか。できることならご遠慮申し上げて、もっと人間味のある対応をしてくれる先生のところへ行きたいと思わないだろうか。

ちょっとした軽い病気ではなく、ガン治療のように命に関わる場合でも、腕前だけ気にすればよいとはいかない。むしろ命に関わるほどならば、ますます、将来のことまで含めて[B]自分を「ヒトらしく」扱ってくれる「ヒト

らしい」先生であることが重要になる。そして、これまで出向いた医者のうちどの先生が本当にそんな人なのか、どの先生はうわべだけなのか、私たちはかなり「ピンとくる」のではないだろうか。そのことは学校の先生に進路相談するときにも、友だちに恋愛相談するときにも、その他日常のあらゆる場面において立ち現われる。互いに「ヒトらしい」関係であるかどうかは、私たちにとってたいへん重要なことなのである。

　重要であるだけに、もしこの「ヒトらしさ」がスムーズに働かないことがあると、いろいろと困った事態が生じてしまう。そもそも、ヒトらしさをリアルに感じるかどうかは、自分の意志によって決定できるとは限らない。頭ではわかっているつもりだがどうにもピンとこなくて「影が薄く」感じたり、逆に「こんなやつは虫けらだ」と考えようとしても思わず「引き込まれて」しまうことは、誰もが人づきあいを通して体験している。自分のこころの中さえ思い通りにならないのだから、お互いつきあうともなれば、双方のリアリティが複雑にからみあって、よりいっそうの悲喜劇を生じるのが私たちである。こちらがいくら情熱をこめて訴えているつもりでも、相手にとっては少しもヒトらしさが迫ってこず、「ヒトもなげな」ふるまいが止まないといったことがある。ところがこちらが絶望したころに、とんでもないところで、相手の「②キンセンに触れる」といったことも

ある。しかし、何に基づいて、どうやってヒトらしさが「ピンときて」いるのかは、誰もはっきりと説明できない。ちょうど話はできるけれど、「話すとは何か」「どうやって話しているのか」と正面切って聞かれると困ってしまうように、私たちはヒトらしさに敏感でありながら、それがいかに成り立っているかを知らないのである。

　そうしたさまざまな事態に一喜一憂するとき、私たちは「現にこのようである」人間の「こころ」の成り立ちについて、問いかけを発せずにはいられない。ヴァーチャルリアリティのようにことさらに人工物に接しなくとも、「ヒトらしさとは何か」という問いは、実はおなじみの日常の中にも③ヒソんでいるのである。話の順序としてはヴァーチャルリアリティより後に来たが、さり気ない毎日から普遍的に④チュウシュツされ得るこの「ヒトらしさ」の方が、私たちにとってはるかに重い意味をもつ問いとなる。私たちが人間であり、人間と関わり合う存在である限り、「ヒトらしさとは何か」という問題の重要性が色あせることはないのである。

　このように考えを進めてみれば、何も今に限って「ヒトらしさ」が問題となるわけではない。どんな場所においても、どんな時代においても、ヒトのリアリティをめぐる問いは常に存在してきたであろう。しかし、C現代はこれまで以上に、誰もがその問題をはっきりと意識する時代なのかもし

れない。

　自然科学の解明が人間の脳に及ぶまでに至った現在、私たちは、「こころをもったヒト」というこの確かなリアリティさえもが、「実体のない」ことであったのを思い知らされる。「こころ」というものが、体のどこかに「実体をもって」存在していると素朴に信じられていた時代はとうに去ったのである。実体があるのは脳であり、脳はあくまで脳であって、こころではない。そして私たちがその事実をどう受けとめるかを考えるひまもなく、医学は急速な進歩を遂げ、脳は死んでいるが体は生きているといったように、以前にはない患者も現われるようになった。そうした患者を医学的に利用可能な臓器をもつモノとして扱ってしまってよいのか、やはり私たちにとってはヒトであり続けるのか、では「ヒト」の条件とは何なのか……、そんな議論がまっこうから取り交わされ、しかもはっきりとした回答を出すことを迫られる時代となっているのである。

　一方で⑤ジュンスイにモノについての技術革新もめざましく、便利なモノに囲まれた私たちのヒトづきあいも変化している。以前なら直接顔をつき合わせて話をしていたのが、今は電話一本で用がすむようになった。その相手も、実際に実体を見知った相手とは限らない。いまや、パソコンの回線上に存在するヴァーチャルなパーティに参加して、「誰か」と対話を楽

しむことができるようになっている。会えない「かわり」にモノを介するのではなく、モノを介する方が「先にたつ」使われ方が成り立ってしまうのである。そうした便利なモノが満ちあふれ、他者とじかに接触する機会が侵食されていけば、どうなるだろう。本当に会うよりパソコン回線上で「話す」方がよほど楽しいと考える者も現われるかもしれない。そうした人にとってピンとくる「ヒトらしさ」とは、はたしてこれまでの私たちの感じる「ヒトらしさ」と同じだろうか。現代は、人工調味料が登場したことでうま味のリアリティが微妙に変質してしまったといわれているが、[D]ヒトらしさについても同じような変容が待ち受けているのかもしれない。

　そして、さらにヴァーチャルリアリティの登場である。「リアルな臨場感」のヴァーチャルリアリティ装置を体験すれば、私たちは、実体がなくても自分がリアリティをもつことがあるのを否応(いやおう)なく実感する。「自分があたりまえだと思っていたリアリティとは、なんだろう」と、思わず考えさせられてしまうのである。うまくできていない対話装置を体験して「こんなのは、少しもリアルではない。機械はしょせんヒトらしくなれない」と反発を感じるときでも、「それではどこがだめなのか」をはっきりいえないのは、もどかしい。ヴァーチャルリアリティ技術が開発され、具体的に形をとってきたことで、私たちはあらためて自分たちに備わった「リア

リティ」や「ヒトらしさ」について意識することになったのである。その上……、もしそうした「反省」をふまえてヒトのヴァーチャルリアリティが本当に実現し、人工的に構成された「ヴァーチャル・誰か」があふれる時代がくるとしたら、いったいどうなるだろう。それは、以前にも増して強力な「スーパー人工調味料」として機能することになるだろう。誰もが気軽に「それ」を味わい、どこへ行っても「それ」があるような時代。そのような時代は、はたして便利なすばらしいだけの時代なのだろうか。夢のようだと喜んでいるうちに、初めには思いもよらなかった問題に直面するような、そんな苦々しい反省を強いられる可能性はないのだろうか。

このように、私たちにとって、現代はさまざまな形で「ヒトらしさ」が意識され、問い直される時代であるといえる。知識と技術が増すことによって、ヒトのリアリティをめぐってE<u>これまでになかった新たな問題があらわになると共に、以前からあったはずの問題が見えてくる</u>……、それが現代という「ヴァーチャルリアリティの時代」なのである。

（北原靖子「プロローグ」　北原靖子編著『ヒトらしさとは何か　ヴァーチャルリアリティ時代の心理学』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。）

※注　ヴァーチャルリアリティ……仮想現実。

問一　傍線部Ａ「まったく同じこと」とあるが、どのような点とどのような点が「まったく同じ」なのか、説明せよ。

問二　傍線部Ｂ「自分を「ヒトらしく」扱ってくれる「ヒトらしい」先生」とあるが、具体的にどのような「先生」なのか、**五〇字以内**で説明せよ。

問三　傍線部Ｃ「現代はこれまで以上に、誰もがその問題をはっきりと意識する時代なのかもしれない」とあるが、それはなぜか、理由を述べよ。

問四　傍線部Ｄ「ヒトらしさについても同じような変容が待ち受けているのかもしれない」とあるが、それはどのような「変容」か、分かりやすく説明せよ。

問五　傍線部Ｅの「これまでになかった新たな問題」と「以前からあったはずの問題」をそれぞれ説明せよ。

問六　傍線部①～⑤のカタカナを漢字になおせ。

①　テンケイ　　②　キンセン　　③　ヒソ

④　チュウシュツ　　⑤　ジュンスイ

問一

問二

問三

問四

問五

問六

④	①
⑤	②
	③

テキスト解答

第一講 「差異」と「類似」を読む 解答

問一

普段はリアリティについて意識しておらず、ヴァーチャルリアリティに接して初めてリアリティとは何かについて意識する点と、普段は「ヒトらしさ」について意識しておらず、「ヒトらしさ」がスムーズに働かないことで生じる様々な事態に一喜一憂する時に初めて、「ヒトらしさ」とは何かについて意識する点

問二

患者の症状や個人的事情を踏まえた上で治療法を考えてくれるといった、人間味のある対応をしてくれる先生。

問三

「こころ」というものが、体のどこかに実体をもって存在していると信じられていたこれまでとは異なり、自然科学の解明が人間の脳に及ぶまでに至った現代では、実体があるのは脳であって、こころではないと考えられるようになり、さらに、医学の急速な進歩により、脳は死んでいるが体は生きているという患者も現れるようになり、「ヒト」の条件が自明でなくなったから。

問四

人工調味料が登場したことでうま味のリアリティが微妙に変質してしまったのと同様に、実際に他者に接触しなくても便利な技術を用いてヒトづきあいができるようになったことで、何に「ヒトらしさ」を感じるかも変化していくということ。

問五

「これまでになかった新しい問題」とは、自然科学や医学の急速な進歩により、「ヒト」の実体の所在や「ヒト」であることの条件が自明でなくなったことや、技術革新によりヒトづきあいが変化したことで生じた、「ヒトらしさ」とは何かという問題。
「以前からあったはずの問題」とは、ヒトづきあいを通してさまざまな事態に一喜一憂するときに発する問いであり、さりげない毎日から普遍的に抽出されうる「ヒトらしさ」とは何かという問題。

問六

①	②	③	④	⑤
典型	琴線	潜	抽出	純粋